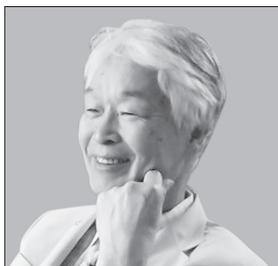


学校歯科健診を学習健診に

新医協(新日本医師協会)会長・尚綱学院大学名誉教授 岩倉政城さん

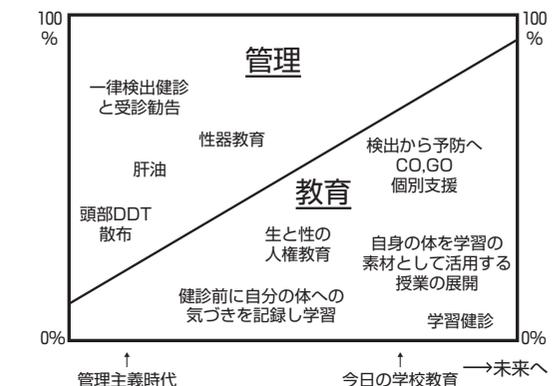
寄稿

子どものむし歯罹患率が改善する一方で、学校健診後の治療勧告が治療につながらず、重症う蝕や多歯う蝕を放置したままの児童・生徒が存在している。「学校歯科健診を学習健診の機会に」と話す新日本医師協会会長の岩倉政城さんに学校保健の課題について寄稿してもらった。



いわくら・まささ
東京歯科大卒、東北大学助教授を経て尚綱学院大学教授。新医協(新日本医師協会)会長。東北大学病院で30年余保健活動と診療に携わる。2014年まで尚綱学院大学教授として子どもの保健、母子保健、精神保健を指導。

図1 管理主体の学校保健から学校に相応しい教育としての学校保健を目指す(岩倉)



管理から学習への学校保健の流れ
学校歯科健診は衛生学的には疾病の有無を検出するスクリーニングに位置づけられてきました。ですから学校医はう蝕や歯周病を検出して、受診勧告の根拠資料を提供すれば健診業務は果たしたと考えがちです。今まさに目の前の生徒が根尖に膿を持った歯を抱えているにもかかわらず、「C」と記号化された途端に学校は、受診勧

どの子ども取り残さないために

治療の必要性を語っても届かない
健診は一人ひとりの生徒と歯科医師が向き合い、本人の口にある変化を教材化することによって自己の身体と向き合う絶好の教育の機会です。しかし、「一校時に2クラスのピッチで健診して下さい」と迫られると、「C」や「G」の検出で精一杯になります。記号や診断名で人を動かすことは期待できません。たとえ、歯科疾患が人の生涯にわたる健康に及ぼす影響の深刻さを生徒・教師に語っても届きません。その理由を教師や生徒の無知からくるものと思ってしまう。学校歯科健診はこれ以上の前進が得られません。

行動変容は実体験で育まれる
ではどうやって生徒を、養護教諭を、そして先生たちを歯科保健に向かわせて行けるのでしょうか。その鍵が学校歯科健診の現場にあります。一人ひとりの生徒の口に展開される歯科疾患の進行を目で、指の触覚で、五感を総動員して伝えることが可能です。学校健診時に「C」「G」を検出したら、生徒の顎下リンパ節を触ってみられませんか。下顎骨下縁の内側にある腫脹したリンパ節を示指・中指・環指で触知し、それを骨縁を乗り越えて外壁にまで移動させると「グルン」と動き、触知されている生徒もそのサイズが分かります。歯科医師が「健康なら大豆ぐらいなだけで、ウズラの卵ぐらいだったよね。この歯、去年はCと違って、すぐに治せば顎にはい菌が入らなかったんだ。放って置いたので歯の根に溜まった菌が顎の骨に入

図2 検出健診から学習歯科健診へ歯に由来する感染を顎下リンパ節の触知で動機づける



でも」と言っています。教師の行動変容は歯科医師の言葉による説明ではなく、リンパ節を直接触れることで始めて起こります。これが教育する学校にふさわしい学習健診です。(図2) 学校保健法では健診の対象者は児童生徒と学校教職員すべてと定められています。多くの先生たちが歯周病でリンパ節を腫らしています。無症状に見える歯周病でリンパ節の腫れに気付くと先生たちに行動変容が起こり、やがて学校全体でむし歯や歯周病の治療とセルフケアを学校の課題として取り組み始めます。

貧困とむし歯に地域ぐるみで
残根だらけのまま受診しない生徒に教師たちが目を向け始めると、家庭の貧困や親のネグレクト、保護者の精神疾患など、今まで知らないうちに済ませていたものが見え始めます。教師はスクールカウンセラーに繋いだり、民生委員と相談したり、児童相談所とともに取り組んでくれるようになります。学校保健会に属している歯科医師もこうしたネットワークの一員として活躍が期待されます。こうした地域ぐるみの活動が子どもを守ろうとする民衆の世論となって貧困と差別のない社会に向けた運動の起点になります。歯科校医が検出健診の枠を越えて学習健診に向けて一歩踏み出す時代がやって来ました。

会員投稿



俳句

初日射す君が瞳の輝けり
野ざらしの仏の笑みや初灯り
ひょうひょうと翁が独り残り福
凍星の億光年や巷の灯
休日の保育所しんと寒椿
米寿まで生きし証や実方両
大仏の如く座禅す受験生
春隣り納豆ねばる熱御飯
受付のほんに小さき玉子糰
丹頂の米粒ほどに高嶺越ゆ

八百八橋物語

浪花 駅名となった橋 第8回 阿倍野橋

同じ場所にある駅なのに、近鉄は「阿部野橋」、JR・地下鉄は「天王寺」。昭和50年(1975)大阪にやってきたあたしはたいそう戸惑った。「阿部野橋」と「天王寺」との関係は、その後何となく分かったが、分からなかったのは阿倍野「橋」。橋は川を越えるものと思っていたので、川のない天王寺駅周辺のどこに阿倍野橋があるのだろうか。

明治29年(1889)に大阪鉄道(現JR大和路線)が湊町・柏原間で開通した。天王寺駅のあるのは上町台地の高所なので、鉄道を通すために南北方向にのびる台地を切り裂き、東西方向の掘割の底に鉄道を通したのである。断ち切られた台地を南北につないだのが阿倍野橋。天王寺駅西側すぐ前の道路が阿部野橋なのである。したがって



「阿部野橋」「天王寺」は大阪の南玄関。近年再開発が進み、新奇な町となっているが、昭和18年から今年で75歳となる阿倍野橋は今なお現役。阿倍野橋が結ぶ阿倍野と天王寺、少し脇道に入ると昭和の色濃く残るあたしの好きな町である。(帝塚山大学 非常勤講師・伊藤純)

線路工事の掘割に架かる

工事について「幅十三間(23.6m)とし、在来区間(支間九米六は大阪市負担、線増のため二十七米は(鉄道)省負担とし、さらに市電気局請願にて湊町方に幅十二米を継足した。又天王寺公園寄の線路敷拡張のため土留、拡張高さ九米、長さ百五十米は市及び交通局の理解により道路下にある。阿倍野の地名は古代の